藤原宮第47次発掘調査現地見学会資料

1986年 4月19日　　奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

目　　的：当調査部庁舎建設に伴う事前調査　　調査期間：1985年12月～継続中

調 査 地：橿原市木之本町宮脇　　条坊位置：藤原京左京六条三坊東北坪

調査面積：約2500㎡

（周辺の調査　第45次調査区面積：約3000㎡、第46次調査区面積：約6000㎡）

検出した遺構　　7世紀後半から室町時代に至る様々な時期の遺構を検出したが、ここでは比較的まとまりのある7世紀後半から藤原京にかけてのものについて報告する。主な遺構は掘立柱建物3棟、塀4条、溝3条、土壙2基である。

Ⅰ　7世紀後半には塀が方形に巡り、南に門、その真北に目隠し塀がある。門は3間×1間の東西棟建物3である。塀5は第45次調査区で北に折れ曲る。門心から北折部までは約33m、南北は約31m以上となる。門の北約20mには東西4間の目隠し塀4がある。調査区内にはこの区画施設に伴う建物がないので、中心的な建物はさらに北方に想定できる。

Ⅱ　藤原京の遺構は、A・Bの2期にわけることができる。

A期には同時期に存在していたと考えられる塀6・7がある。これらの塀は南の第46次調査区分を含めると 100m以上におよぶ。このうち東側の塀7は当坪を東西にほぼ二等分する位置にあたっている。調査区の南端に近いところでこれらの塀の柱間寸法が他に較べて特に広い箇所があり、出入口とみることができる。これらの塀と西の坊間路との間には建物1・2がたっている。建物1は5間以上×2間の東西棟建物で、建物の内部北側に間仕切り風の施設がある。

B期になると塀や建物はなくなって、調査区中央に東西溝8が掘られる。さらに南にはA期に入口が設けられていた位置に東西溝9・10が掘りこまれている。溝心心距離は約9mで、この間を東西道路として利用していたようである。

出土遺物　　現在整理中であるが、7世紀中頃から後半にかけての軒瓦や溝8から出土した奈良時代後半の墨書土器（「香山」、「荒田大年」）などが注目される。

まとめ　　7世紀後半から藤原京の時期にかけて、この地域の土地利用がかなり明確になった。　まず7世紀後半から藤原京の時期にかけて、塀5の南側のように東西道路としての役割を果たしつづけているらしい部分を指摘できる。

さらに、京内で南北に長い合計1町分の土地利用法のあったことが明らかになった。

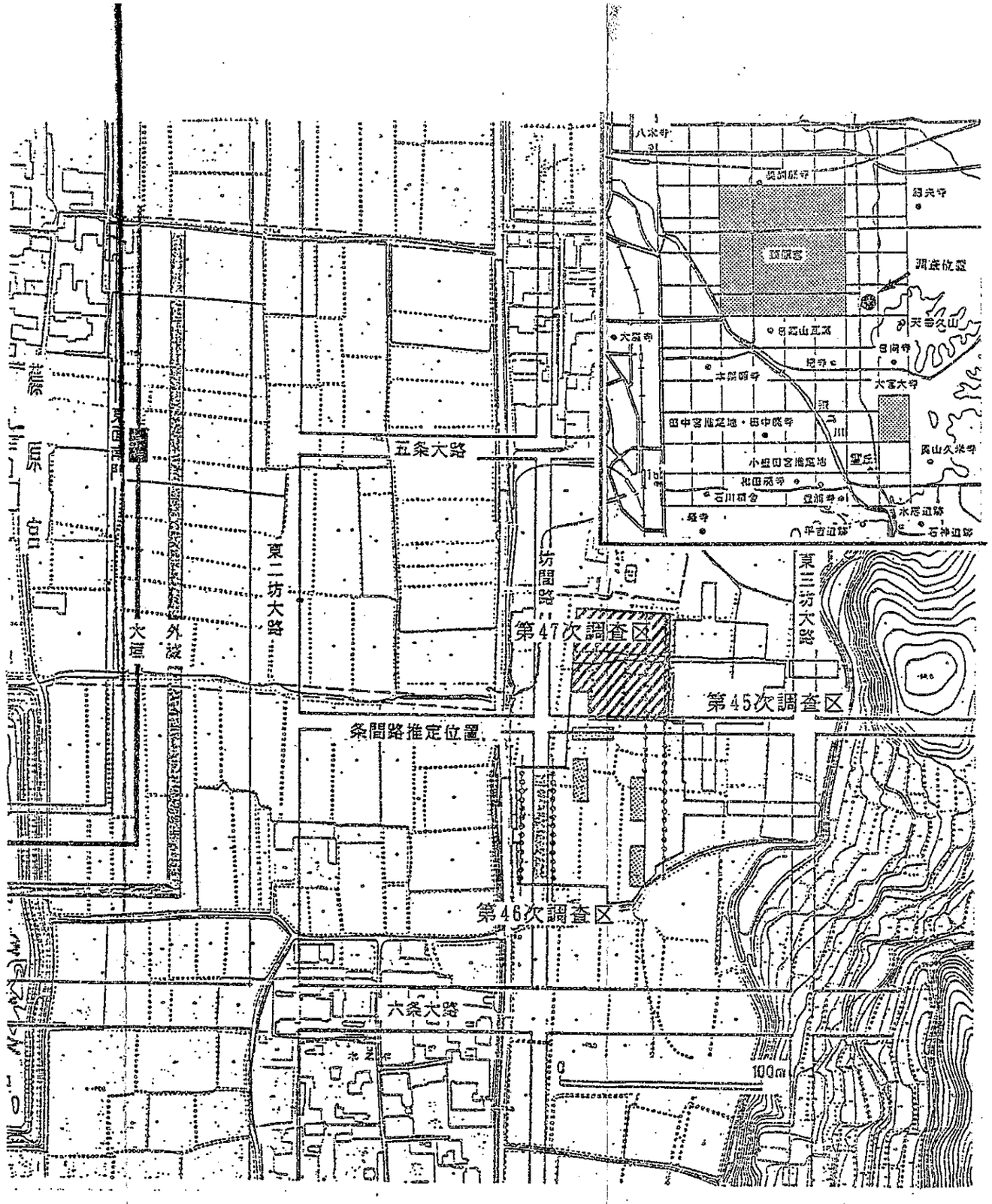

図1　推定条坊と検出遺構関係図

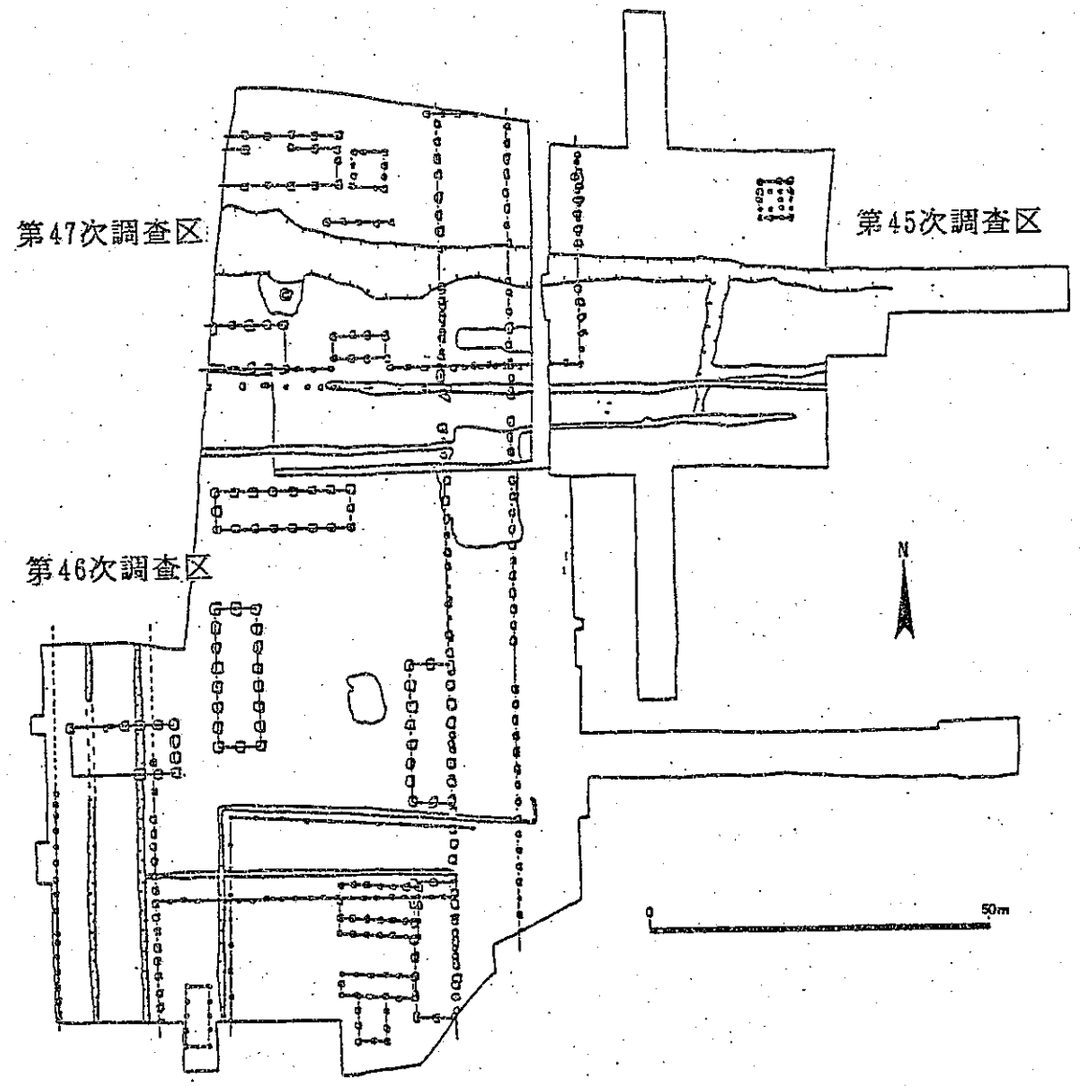

図2　第45～47次調査区遺構略図

建物の規模一覧表　　（単位m）

時期	遺構番号	桁行	柱間寸法	梁行	柱間寸法
7世紀半	建物 3	3間	2.7	1間	3.0
	塀 4	4間	2.4前後		
	塀 5	12間以上	2.1前後		
藤原宮期	建物 1	5間以上	3.5	2間	3.5, 1.75, 北間仕切り
	建物 2	5間以上	2.5	2間？	3.0？
	塀 6	19間以上 入口部	2.5前後 4.0		
	塀 7	20間以上 入口部	2.33 前後 4.0		

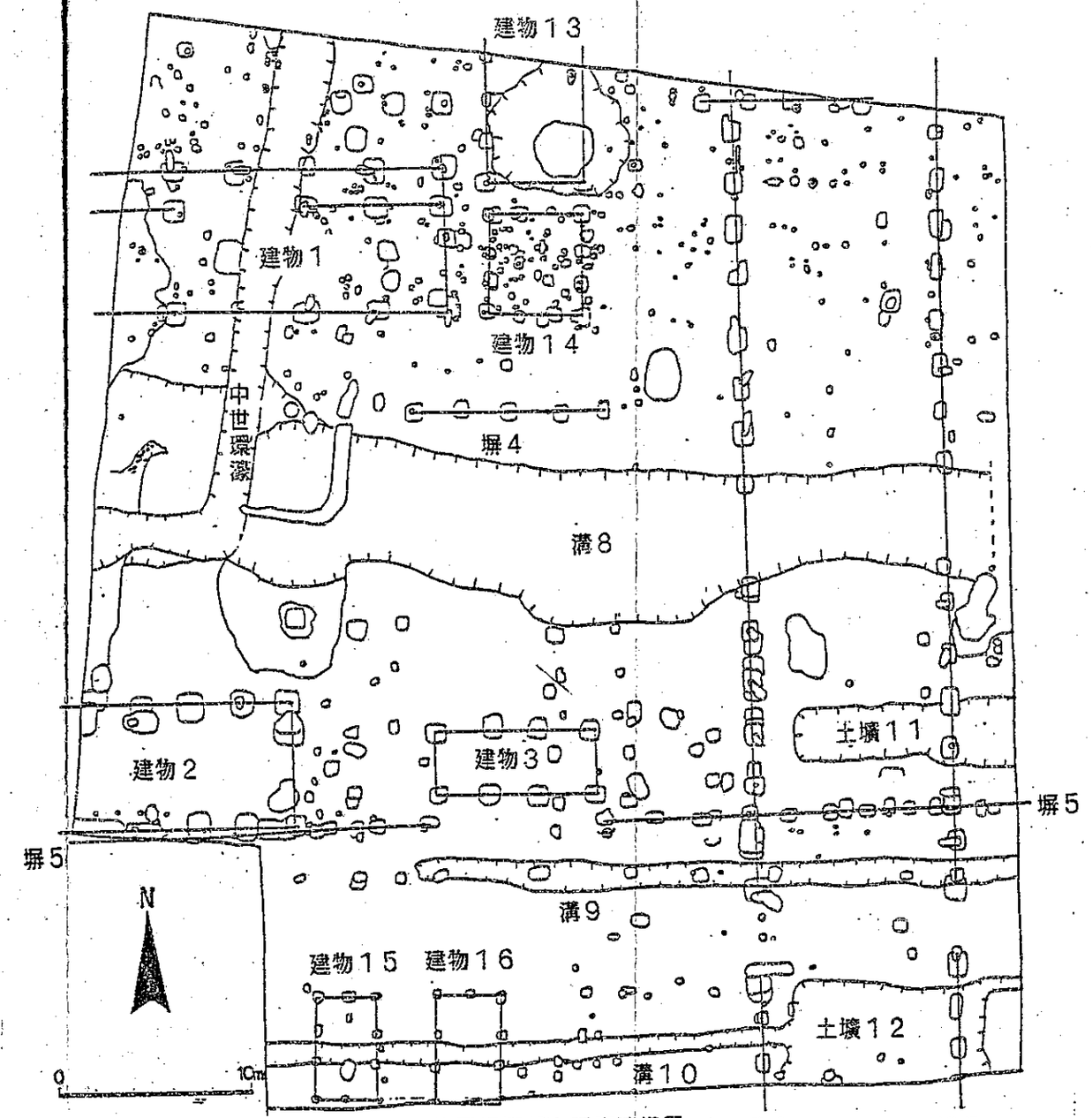

図3　藤原宮第47次調査遺構図